

広安小学校区自主防災クラブは、震災直後に避難所になった小学校で、自主的に避難者の支援を始めた会員の橋本純平さんや、大学生の竹林明日香さんが中心となって組織された。震災直後の様子や活動について、橋本さんと竹林さん、益城町危機管理課・奥村敬介さんに話を聞いた。

# みんなの協力が大切な避難所での生活

地震で大きな被害を受けた益城町の広安小学校区に、昨年11月、自主防災クラブができた。これは、地震直後に避難所となった小学校で、避難者の面倒を見始めた会員の橋本純平さんや、大学生の竹林明日香さんが中心となって

作ったものだ。

避難所では、特に多くの子どもたちが手伝ってくれたので、大変助かったと橋本会長は話した。



佐藤すず 記者

子どもたちがおにぎりをにぎったり、飲み物を配ったりする手伝いをしていたのは、すごいと

思った。小学校低学年の子でも、手伝っていると聞いて、びっくりした。

また、橋本さんたちの活動のおかげで、役場の人たちが被災者に対する

仕事に専念できたので、みんなが協力し、仕事を分担するのは、大切なことなんだと思った。私は、もしも自分の町に地震が起こって、避難所に避難し、手伝えることがあったら、協力して、周りの人の役に立てるようにしたいと思う。

# 避難所での自主的な活動から学んだこと

益城町の広安小学校区で自主防災クラブを立ち上げた橋本純平さんらの話から、大災害のときの避難所のあり方について学ぶことが多かった。使えなくなった建物を倉庫として利用したり、避難所内の新聞を作ったりなど活動は多彩だった。広安小体育館が、避難所として使えるか不明だったので物置にした。避難所には、多くの物資を

置く場所が必要だったのでも、体育館を物置倉庫として使った。このことは良いアイデアだと思う。次に、とにかく話したり、あいさつをしたりして人間関係を築き上げたこと。ルールもあれこれ決まらないことも良かった。これもお互いに信頼があったからではなかったか。今からでも、町内の人たちと仲良くなっておくと、いざというときに役に立つと思う。



赤谷大祐 記者

避難所の小学校では、ボランティアの人たちが行政からの連絡を噛みくわいて「えがお新聞」を作っていた。行政だと堅苦しいイメージがあるが、優しく書き直せば、理解しやすくなる。おもしろい炊き出しなどの記事があれば、会話のネタになって、被災者の気持ちはなごませたのかも

しれない。

地震のせいではできなかった夏祭りの代わりに七夕祭りを開いた。地震発生約3カ月後にお祭りができたことで、元気や勇気をもたらした人がいるかもしれない。

非常食などを備蓄したり、防災訓練に参加したりすることも防災だが、あいさつや顔見知りを増やすことも、立派な防災なんじゃないかなと思う。



奥村敬介さん



竹林明日香さん



橋本純平さん



自主防災クラブでは橋本さんを中心とする大人の人たちだけでなく、子ども記者と同世代の子どもたちに取材をした。

